

## 区部ユース・プラザ基本構想検討委員会第3回における主な御意見の概要

### 【都が担うべき役割について】

- 多様なニーズに応じられること、高校生以上の年代に対するサポートを充実させること、宿泊機能も含めて多様なスペシャルアクティビティや体験ができるというようなことは広域的な施設としては非常に重要。
- より広域的な指導者研修、つまり支援者支援のような機能があるとすごくよい。
- 育成、支援をする人、あるいは育成に携わる人材のそのものの育成というのが本当に大切であることから、情報共有や、研修、交流をすることは本当に大事。
- 多様な青少年への対応や社会的に孤立しやすい状態になっている若者へのアプローチは重要。
- 都が直接アプローチを行っていくことは限界があるのではないか。多様な青少年への対応や社会的に孤立しやすい状態になっている若者へのアプローチを行う団体が現れている中、この施設も含め、団体にとって活動しやすい環境を整備して彼らの活動を支援していくことが、都として担っていくべき大きな役割ではないか。
- 探究や STEAM 教育の広がりによって高校生たちの研究に対する関心が高まっているなか、必ずしも学校の中で研究等ができる場所が自由に使えるわけでは無かったり、サイエンス、テクノロジー、アートの部分に関しては、まだ高校生たちが十分に活動ができていない部分があると感じている。そういった高校生たちや彼らをサポートする団体にとって使いやすい場所としての支援が必要になってくると思う。
- これから地域のクラブ活動が増えていくなか、現状一つの場所を一つの団体が使っているところでも、利用自体が制限されていく状態になると思う。多摩と区部の特色分けとしても、彼らのような団体にとって利用できる場所なのか、もしくは、全国・国際規模で使える場所なのか、そういった観点での役割分担もできていくといい。
- いろんな課題を抱えている青少年がたくさんいて、一つ一つの課題というのは、レイヤーの狭い小さいものかもしれないが、東京都で合わせれば、かなりの人数がいるイメージが一つあると思う。多様な青少年の課題に際し、上手い方向に持っていけるような活動を誰が提供するのかというのも一つあるかと思う。誰がという時に、東京都が直接実施していくことでは、細かな専門的な分野は対応できないので、NPO との関係というのも当然必要になってくる。
- 宿泊施設の廃止の影響が非常に出ており、都内で、我々が夏休みの体験活動を企画しようと思ってもまず予約がほぼ取れず、子どもたちからのニーズであったりとか、学校の先生から学校でできない体験をぜひということ、ご期待をいただくが、そもそも、宿泊ができる場所がなく、絶対的なキャパシティとして無理がある状況になってきている。

- 多摩は、自然を活かしたということであれば、体験色をもう少ししっかり出すようなかたちをやっぱりとっていく必要性はあるかと思う。区部に関しては、リーチがしやすいとか、ちょっと何かあったときに避難がしやすいといえますか、そういう立地的な位置付けはあるかと思うので、もう少し個人の利用といえますか、サポート体制というのも意識してもいいのかなと思う。
- 社会教育施設は、目的が明確なものでないと立ち寄りにくいというのも、現状あるかなと思っており、そういった理由での利用を踏まえたうえで、個人視点も少し考慮する対応を考えると良いと思う。例えば、都の施設として、一時的にそこでお休みをいただきながら、都の専門的な相談機関の方々と一緒に繋いでいくとかですね、次に移っていただくための支援というか、そういったことも考えられると、宿泊施設の意義としても非常に重要性は高いのではないかなと思う。
- 施設自体を貸し出し、多様な悩みを抱える青少年に関しては引き続きNPOがケアするというタイプのかたちか、都の専門的な支援の方が、この施設にこういった方が来ているということを繋いで、そこに専門的な支援の方に来ていただくとか、二次的にそういった若者が相談に行くとかですね、コーディネーションをしていく起点としての利用はある。
- 一方で、個人利用ではなく団体利用で十分ではないかという考えもある。NPOにとって、この場所を使えるっていうところを通して、支援することは重要だが、個人に関して、悩みがあった時、どこに相談すればいいのかという悩みは大きく、そういった人達にとって、この場所を知って、来ること自体がまず一つの大きな障壁になる。その障壁を解決しているのが、団体ではないかと感じているため、個人でのアプローチではなく、団体としてのアプローチでカバーしていくべきではないか。
- 広域施設で、高校生以上で多様なニーズといったときに深刻なケースをどこまで想定するかというときに、現場では住居の支援の重要度が増してきて、そこにニーズが大きいことは押さえておく必要があると思う。全体の定員のうちの一部をそういった緊急避難的な場所のために活かしておくことは有り得るのではないか。
- 別の個人もあるかと思っており、例えば、Eスポーツを一人じゃなくてチームでやってみたいとか、成長機会をどこかに求めていきたいが、学校では対応しきれないところもあるかと思う。そういう意味ではいわゆる広域施設として、インキュベーション施設のように、多様な専門家の方々が、それはこういうふうにしたらもう一歩前に進めるかもねと、実は、何々君も同じこと言っているから二人で話してみたらとか、繋げていくようなかたちの取組というのも十分あり得る。何か取り組んでいこうという意欲的な若者に対するサポートみたいなものが出来るととても良い。
- 現在、探究が目指している本質的なところと異なり、先生のアドバイスに素直に従って結果をとりあえず出す、探究自体がこなすことみたいになってしまう層は多いのではないかなと思っており、そういうところに産業とか実業の方との繋がりが出来ると良いと思う。

### 【多様性を持った運営・事業について】

- 多様なニーズとか専門性を広域的にフォローしていくうえでは、都がすべて担うというより、それぞれのところで専門性を持った NPO 等と組んでやっていくことが前提にならざるを得ないかと思う。それは悪いことではなく、むしろプラスの意味が大きい。
- ユースにフォーカスした施設になったときには、若者自身が運営に携わっているかどうかもすごく重要になってくる。事業者が単独でやるのではなく、色々なものと組み、さらに若者の声も反映させられるチャンネルを持って運営していくことが必要になると思う。
- 割と稼働が下がるのは、平日の日中ではないかと思っており、不登校のお子さんが稼働の低いタイミングの時にいいですよというかたちで来ていただけるようなことを、各地の適用指導教室等を運営されている教育委員会の部署とお話しながら、繋がって運営ができるといつでも稼働している有益な施設になっていくのではないか。
- この施設が、一つのサードプレイスとしての役割としてではなく、様々なサードプレイスが共存していることによって、様々なニーズに対して若者が思ったときにこの施設を利用するときに自分自身はこの場所は合わなかったけれども、例えばこの施設の中で違う団体と活動していく中で、ここは合うというサードプレイスをみつけられる、より広く選択肢を持てるような、そういった役割が事業や、運営の部分で必要となってくるのかなと思う。
- 複数の同じ事業だとしても、複数の団体たちがこの施設を利用しやすく、場を作りやすいような多目的で設計されている施設が必要となってくるのではないか。具体的な仕組みとしては、一つ目は施設として様々な団体が利用し、多様なイベントを開いたり、何らかの支援を施設の中で行っていったりするとかたち。二つ目は、情報提供の場所かと思っていて、実際に登録していない団体や、近くにある団体、現状場所を使って何かをやるのではなく、相談窓口として機能を持っている団体さんたちと連携して、団体の中で何らか自分たちの団体ではカバーしきれない、少しプラスアルファの情報や対応が必要な方に対してこういった団体とかもあるよという情報を施設として提供してあげるそういったかたちが考えられる。
- 団体利用、個人利用あったときに、その間をつなぐ存在というのは非常に大事であるので、その辺りが考えていけるとすごくいい。
- 施設や場がどうあるべきかという大きな話としては、最近の人口減少で使う人が減り得ることを考えたときに、誰々さんにこういうサービスを提供します、という考え方だけではなく、そこで能動的に何かを生み出すということが求められている。何か自己実現に向かっているものが得られる、付加価値という言葉をしてみましたが、そういったものを何らか生み出せる場であること、発想が必要だと思う。利用者のターゲットになっている方に何を生み出せるかということのをコーディネートしていく団体というのが、こういう施設には不可欠になっているのではないか。
- 例えば都内で非常に活躍している NPO さんに、出先機関のようなかたちで、シェアオフ

イスのように一部利用してもらおうというのは、良いのではないかと考えている。団体が得意な分野は皆異なるため、一緒に仕事をしながら、この部分はうちがやれるよとか、こういったところのサポートは出来るみたいなどころを、お互いで確認しながら一緒に進めるということは、一つの共同体として非常に面白く、相互の交流も図れる。例えば生活困窮の若者が来たとき、5~6団体集まってきて、そこで意見交換しながらもっとこういうふうにしていけそうだとか、話がしやすいかと思う。そういった場に若い方も来ていただいて、意見をもらうのもすごく面白いので、団体とコラボレーションする場があるといい。

- シェアオフィスと違うかたちでいうと、例えば共同で一緒に高校生に対して、複数の団体達が同じ場を共有しながらそれぞれ、こっちはブースではこの団体が高校生に対してキャリア相談していったり、違う団体が違うブースで同じキャリア相談していたり、みたいな大型の相談会を複数の団体が合同して一緒に行っていく。それを施設側としてそういった支援を、定期的開催を行っていくような、それを通して、お互いの相談方法とか支援方法とか、ワークショップの方向とかを見ていくことによって、この部分で一緒に出来るそうだなとか、この部分いいなと思って新たに一緒にこういうイベントを作っていくかみたいなどころでの方向性が生まれるようになるのではないかと感じている。
- 多様性という意味で、毎日じゃなくても構わないが、夜に活発になる若者向けに開かれた場を検討できると、いいのではないのかと思う。
- 夜のセンターについて、交通の便を考えると、施設がバージョンアップしても、結構不利かなという気も少ししており、泊まりに来る方があの場には合っているのだろうと思う。施設のハード面を考えても、例えば仕事帰りにふらっと来てそこから出勤したっていいと思う。そういう機能のほうが、意味があるのかなという気はしている。

### 【区部と多摩の特色について】

- 今の体験活動の主流は、施設内ですべて完結しないものが多いと考えている。現在の多摩ユース・プラザでは、施設の中で全てのアクティビティや、体験学習を完結させようというふうに感じられる。多摩ユース・プラザをセンターにして、もう少し広域に周囲を巻き込んだようないろんな体験ができるような形になっていけると、多様な体験の幅がより広がっていくのではないかな。
- 色々な見方もあるが、PAも出来るというのは強みだと思う。ただPAを誰でも使える施設にしていくというよりは、あれもできる中で、周囲の自然環境とどう組んでいくとか、敷地内のハイキングコースをもう少し使えるようになるとか、近くの高尾の森自然学校を始めとした近隣施設とのやり取りを増やしていく。その場合、周囲のアクセス・移動手段みたいのが増えてくると良いと思う。
- 例えば、多摩ユース・プラザに来ると、どういう事業者さんやサービス、移動手段が使えるて、アレンジができるのか、何かを生み出すにあたっての情報とかを元々連携しておく。

そういったこの施設で行える多様な事業の調達部分も施設の機能になっていくのではないかと思う。

- 地域とのネットワークとか地元のバス会社とのネットワークとか、そういう広がりをもっと持たせた運営なり事業を行っていくということが今後の多摩には求められるのではないか。
- 多摩ユース・プラザは、東京のいろいろな自然などをきちんと認識してもらう意味であそこにあるので、その施設の中で完結するのではなく、多摩の自然やそのような活動スペースとかそういうところに触れることによって、より東京の良さや改善点を見つけていくことにつなげることが、先ほどの目的に合った環境面などになってくるということではないか。
- ボランティアはもっとたくさんあったほうがよい。自然にまつわるボランティア・環境整備などボランティアにもいろいろあると思うので、高校生たちが、中学生を含めてもいいと思うが、個人的に多摩ユース・プラザに行って、いろいろな学校の子たちと一緒にボランティア活動とかたちで、環境整備のことなどをやってみる機会はとても良いと思う。施設の職員では教えきれない場合、高尾の周辺の企業で山の仕事についている方をお願いすることで現場に行ったり、施設側でチェーンソー等の道具を見せていただいたりすることも考えられる。多摩ユース・プラザでなければ高校生で申し込んでいくのは難しい場合もあるので、そういう機能としてのもっととがって行けると良いと思う。
- 区部ユース・プラザは一つの団体が一つのことをやっていくのではなく、より競争的な場所として色々な団体が同時多発的に多様なイベントを行っていったら、お互いのことを知れる機会であり、新たな競争が生まれていくような、複数の団体たちが連携しながら、お互い交流していきながらきっかけを作っていく場所ではないか。